

# 哲学・倫理学教育の参考となる映画作品リスト

19/01/20 更新

作成: 萬屋博喜

情報提供者: 笠木雅史、杉本俊介

## このリストについて

このリストは、哲学・倫理学教育の参考となる映画作品の紹介を目的としています。現在、リストは作成中であり、主に SNS での情報提供を受けて、随時更新していきます。情報提供者の名前を記載したいと思いますので、記載を希望される場合、ぜひご連絡ください。

また、このリストは、哲学・倫理学系のテーマを扱った映画作品の網羅が目的ではないため、偏りがあることをあらかじめ十分にご注意ください。通販・レンタル・動画配信サービスで比較的容易に視聴できるものを厳選しております。リストの作成に際しては、日本医学教育学会のテンプレートを参考にさせていただいた上で、上映時間を追記いたしました\*1。

## 映画作品の教育上の活用法について

哲学・倫理学教育上の映画の活用法については、

1. 講義中に見せる（一部／全編）：問題提起、事例説明、ディスカッションの素材……
2. 事前・事後学習として全編見せる：レポートの課題、講義の予習・復習……
3. 想定する視聴人数：10～20 人（小規模）、40～70 人（中規模）、100 人以上（大規模）

といったものが考えられますが、それ以外にも活用法がありましたらご意見ください。また、作品をご紹介いただける場合には、どういう教育上の目的でどのシーンをどこまで見せるのか、といったことも併記していただくと助かります。

---

\*1 「生命医療倫理教育に有用な映画作品リスト」は、日本医学教育学会・倫理プロフェSSIONAL委員会活動 2013 のサイトに掲載されています ([http://jsme.umin.ac.jp/com/pro/jmse\\_recommend\\_movies.html](http://jsme.umin.ac.jp/com/pro/jmse_recommend_movies.html))。

## 1 哲学・倫理学入門

- デレク・ジャーマン『ウィトゲンシュタイン』(1993年、イギリス、75分)：ウィトゲンシュタイン、写像理論、言語ゲーム
- ロバート・ゼメキス『コンタクト』(1997年、アメリカ、153分)：オッカムの剃刀、実証主義
- エリック・グスタヴソン『ソフィーの世界』(1999年、ノルウェー、111分)：哲学史入門
- イラン・デュラン・コーエン『サルトルとボーヴォワール 哲学と愛』(2006年、フランス、104分)：サルトル、ボーヴォワール
- アレックス・デ・ラ・イグレシア『オックスフォード殺人事件』(2008年、スペイン・イギリス・フランス、107分)：戦場で論考の草稿を書くウィトゲンシュタイン
- ジャン＝ピエール・ポッジ、ピエール・バルジエ『ちいさな哲学者たち』(2010年、フランス、102分)：哲学対話、哲学教育
- マルガレーテ・フォン・トロッタ『ハンナ・アーレント』(2013年、ドイツ・ルクセンブルク・フランス、114分)：アレント、悪の凡庸さ
- ラウル・ベック『マルクス・エンゲルス』(2017年、フランス・ドイツ・ベルギー、118分)：マルクス、エンゲルス、ブルードン

## 2 認識論

### 懐疑論

- 押井守『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』(1984年、日本、98分)：夢の懐疑
- ラナ・ウォシャウスキー、リリー・ウォシャウスキー『マトリックス』(1999年、アメリカ、136分)：夢の懐疑、水槽の中の脳
- キャメロン・クロウ『バニラ・スカイ』(2001年、アメリカ、136分)：外界の懐疑、経験機械
- リチャード・リンクレイター『ウェイクニング・ライフ』(2001年、アメリカ、99分)：外界の懐疑
- クリストファー・ノーラン『インセプション』(2010年、アメリカ、148分)：夢の懐疑、無意識

### 認識的不正義

- アンソニー・ミンゲラ『リプリー』(1999年、アメリカ、140分)：認識的不正義、アイデンティティ権力
- ミック・ジャクソン『否定と肯定』(2016年、イギリス・アメリカ、107分)：認識的不正

義、ホロコースト

### 3 心の哲学

#### 意識

- リドリー・スコット『ブレードランナー』(1982年、アメリカ、116分)：クオリア、人工知能、実存
- ジェームズ・キャメロン『ターミネーター』(1984年、アメリカ、108分)：心身問題
- ヴィム・ヴェンダース『ベルリン・天使の詩』(1987年、フランス・西ドイツ、127分)：クオリア
- 押井守『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』(1995年、日本、85分)：脳の中の幽霊、心身問題、サイボーグ、アンドロイド、意識

#### 人工知能

- スティーヴン・スピルバーグ『A.I.』(2001年、アメリカ、146分)：ロボットの心、人工知能
- 吉浦康裕『イヴの時間 劇場版』(2009年、日本、106分)：アンドロイド、家族
- スパイク・ジョーンズ『her 世界でひとつの彼女』(2013年、アメリカ、120分)：人工知能、愛、中国語の部屋
- アレックス・ガーランド『エクス・マキナ』(2015年、イギリス、108分)：人工知能、チューリングテスト、生命
- ニール・ブロムカンプ『チャッピー』(2015年、アメリカ、120分)：人工知能、学習、教育

### 4 形而上学

#### 時間

- ジェームズ・キャメロン『ターミネーター2』(1991年、アメリカ、137分)：タイム・パラドックス
- ジェームズ・ウォン『ザ・ワン』(2001年、アメリカ、87分)：パラレルワールド
- イ・シミュン『ロスト・メモリーズ』(2001年、韓国、136分)：パラレルワールド
- アルフォンソ・キュアロン『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(2004年、アメリカ、142分)：因果のループ
- 細田守『時をかける少女』(2006年、日本、98分)：タイムリープ
- マイケル・スピエリッグ『プリデスティネーション』(2014年、オーストラリア、97分)：因果のループ

## 人の同一性

- ポール・ヴァーホーヴェン『トータル・リコール』(1990年、アメリカ、113分)：人の同一性、記憶交換、偽りの記憶
- スパイク・ジョーンズ『マルコヴィッチの穴』(1999年、アメリカ、112分)：自己認識、アイデンティティ
- クリストファー・ノーラン『メメント』(2000年、アメリカ、113分)：人の同一性、記憶、自由意志
- クリストファー・ノーラン『プレステージ』(2006年、アメリカ、130分)：人の同一性  
【用途】 デレク・パーフィットのトランスフォーマー(思考実験)の説明
- マブルク・エル・メクリ『その男ヴァン・ダム』(2008年、ベルギー・ルクセンブルク・フランス、96分)：自己認識、アイデンティティ
- リチャード・グラツァー、ワッシュ・ウェストモアランド『アリスのままで』(2014年、アメリカ、101分)：記憶障害

## 自由意志

- ポール・ヴァーホーヴェン『スターシップ・トゥルーパーズ』(1997年、アメリカ、129分)：自由意志、責任
- スティーヴン・スピルバーグ『マイノリティ・リポート』(2002年、アメリカ、145分)：監視社会、自由意志
- ザック・スナイダー『ウォッチメン』(2009年、アメリカ、163分)：自由意志、超人、正義
- ジョージ・ノルフィ『アジャストメント』(2011年、アメリカ、106分)：自由意志、運命、愛
- フィル・ロード、クリストファー・ミラー『LEGO ムービー』(2014年、アメリカ・オーストラリア・デンマーク、100分)：自由意志
- ジャコ・ヴァン・ドルマル『ミスター・ノーバディ』(2010年、フランス・ドイツ・カナダ・ベルギー、141分)：アイデンティティ、運命、自由意志

## 5 社会哲学

- ルネ・クレール『そして誰もいなくなった』(1945年、アメリカ、97分)：信頼
- ジョン・カーペンター『遊星からの物体 X』(1982年、アメリカ、109分)：信頼
- ハロルド・ライミス『恋はデジャ・ブ』(1993年、アメリカ、101分)：習慣、差異と反復  
【参考】 NHK『哲子の部屋』制作班(著)、國分功一郎(監修)『哲子の部屋 I: 哲学って、考えるって何?』(河出書房新社、2015年)
- ヴォルフガング・ベッカー『グッバイ、レーニン!』(2003年、ドイツ、121分)：社会主義、共産主義
- モーガン・スパーロック『スーパーサイズ・ミー』(2004年、アメリカ、98分)：社会的責任

- ジョン・マッデン『プルーフ・オブ・マイ・ライフ』(2005年、アメリカ、103分)：家族
  - マイケル・ムーア『キャピタリズム マネーは踊る』(2009年、アメリカ、127分)：資本主義
  - J・J・エイブラムス『SUPER 8』(2011年、アメリカ、111分)：家族
  - 福田雄一『HK 変態仮面』(2013年、日本、105分)：生成変化、アイデンティティ
- 【参考】 NHK『哲子の部屋』制作班(著)、千葉雅也(監修)『哲子の部屋 III: “本当の自分”って何?』(河出書房新社、2015年)

## 6 法哲学

- チャーリー・チャップリン『モダン・タイムス』(1936年、アメリカ、87分)：労働権、働く意味
- シドニー・ルメット『十二人の怒れる男』(1957年、アメリカ、95分)：アメリカの陪審員制度
- ジョナサン・デミ『フィラデルフィア』(1993年、アメリカ、125分)：エイズ差別、同性愛差別
- マイケル・ラドフォード『イル・ポスティエーノ』(1994年、イタリア・フランス、107分)：表現の自由
- 森達也『A』(1998年、日本、135分)：オウム真理教、差別
- キンバリー・ピアース『ボーイズ・ドント・クライ』(1999年、アメリカ、119分)：LGBT、人種差別
- 想田和弘『選挙』(2007年、日本、120分)：日本の選挙制度、民主主義
- 周防正行『それでもボクはやっていない』(2007年、日本、143分)：冤罪、日本の司法制度
- ガス・ヴァス・サント『ミルク』(2008年、アメリカ、128分)：LGBT、マイノリティの権利
- 佐藤祐市『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』(2009年、日本、101分)：労働権
- サラ・ガブロ『未来を花束にして』(2015年、イギリス、106分)：参政権、男女平等
- セオドア・メルフィ『ドリーム』(2016年、アメリカ、127分)：性差別、人種差別
- マーティン・スコセッシ『沈黙 サイレンス』(2016年、アメリカ、162分)：キリスト教、迫害
- マイケル・グレイシー『グレイテスト・ショーマン』(2017年、アメリカ、105分)：差別、身分・経済格差

## 7 倫理学

### 規範倫理

- アラン・J・パラク『ソフィーの選択』(1982年、アメリカ、150分)：究極の選択
- ポール・ヴァーホーヴェン『インビジブル』(2000年、アメリカ、112分)：ギュゲスの指輪
- クリストファー・ノーラン『ダークナイト』(2008年、アメリカ・イギリス、152分)：究極の選択
- 中村義洋『フィッシュストーリー』(2009年、日本、112分)：正義
- マシュー・ヴォーン『キック・アス』(2010年、イギリス・アメリカ、117分)：正義
- ジョシュア・オッペンハイマー『アクト・オブ・キリング』(2012、デンマーク・ノルウェー・イギリス、121分(オリジナル166分))：黄金律、政治的自由

### 生命・医療倫理

- 野村芳太郎『砂の器』(1974年、日本、143分)：ハンセン病差別
- ジョエル・シュマッカー『愛の選択』(1991年、アメリカ、111分)：終末期
- アンドリュー・ニコル『ガタカ』(1997年、アメリカ、106分)：優性思想、遺伝子操作
- ジェームズ・マンゴールド『17歳のカルテ』(1999年、アメリカ、127分)：精神医学
- ラッセ・ハルストレム『サイダーハウス・ルール』(2000年、アメリカ、131分)：人工妊娠中絶
- アレハンドロ・アメナーバル『海を飛ぶ夢』(2004年、スペイン、125分)：安楽死
- 瀬々敬久『感染列島』(2009年、日本、138分)：パンデミック、医療資源配分
- ダンカン・ジョーンズ『月に囚われた男』(2009年、イギリス、97分)：クローン人間
- 豪田トモ『うまれる』(2010年、日本、104分)：QOL、出生前診断
- ニール・バーガー『リミットレス』(2011年、米国、105分)：エンハンスメント

### 環境倫理

- 坂野義光『ゴジラ対ヘドラ』(1971年、日本、85分)：公害問題(田子の浦港ヘドロ公害)
- 宮崎駿『風の谷のナウシカ』(1984年、日本、116分)：環境問題、科学技術と文明
- 高畑勲『おもひでぼろぼろ』(1991年、日本、118分)：自然と人間の共生、里山倫理
- 高畑勲『平成狸合戦ぽんぽこ』(1994年、日本、119分)：都市開発、持続可能性
- 宮崎駿『もののけ姫』(1997年、日本、133分)：自然と人間の共生、貧困と環境のトレードオフ
- スティーブン・ソダーバーグ『エリン・ブロコビッチ』(2000年、アメリカ、130分)：六価クロム汚染訴訟
- デイビス・グッゲンハイム『不都合な真実』(2006年、アメリカ、94分)：地球温暖化問題

【注意】 本作には、事実誤認やデータ誇大化が含まれているという批判がある。英高等法院の判決（2007年）と合わせて紹介すること。

- フィッシャー・スティーヴンス『地球が壊れる前に』（2016年、アメリカ、96分）：地球温暖化問題

#### 動物倫理

- 黒田晶郎（他）『いぬのえいが』（2004年、日本、96分）：伴侶動物
- 【用途】 『A Dog's Life』（約8分）
- エルヴィン・ヴァーゲンホーファー『ありあまるごちそう』（2005年、オーストリア、96分）：大量生産
  - ニコラウス・ゲイハルター『いのちの食べかた』（2008年、ドイツ・オーストリア、92分）：大量生産
  - ロバート・ケナー『フード・インク』（2008年、アメリカ、94分）：大量生産

#### 情報倫理

- ジョセフ・ラスナック『13F』（1999年、アメリカ、100分）：バーチャル・リアリティ
- 伊藤俊也『映画監督って何だ!』（2006年、日本、88分）：著作権
- マーク・エイブラハム『幸せのきずな』（2008年、アメリカ、119分）：知的財産権
- 中村義洋『白ゆき姫殺人事件』（2014年、日本、126分）：SNS、ネット炎上、メディア・リテラシー
- 片淵須直『この世界の片隅に』（2016年、日本、129分）：クラウドファンディング、戦時下の生活
- ジェームズ・ポンソルト『ザ・サークル』（2017年、アメリカ、110分）：SNS、プライバシー

#### 戦争倫理

- 橋本忍『私は貝になりたい』（1959年、日本、113分）：戦後補償
- 岡本喜八『日本のいちばん長い日』（1967年、日本、157分）：戦争責任
- スティーヴン・スピルバーグ『プライベート・ライアン』（1998年、アメリカ、170分）：ノルマンディー上陸作戦
- 小泉堯史『明日への遺言』（2008年、日本、110分）：戦争責任
- イ・ハン『戦場のメロディ』（2015年、韓国、124分）：戦災孤児

#### スポーツ倫理

- セバスチャン・グロブラー『コッホ先生と僕らの革命』（2011年、ドイツ、114分）：フェアプレー、サッカー
- ブライアン・フォーゲル『イカロス』（2017年、アメリカ、121分）：ドーピング

## 建築倫理

- ナサニエル・カーン『マイ・アーキテクト ルイス・カーンを探して』(2003年、アメリカ、116分)：建築意匠・設計
- ノルベルト・ロベス・アマド、カルロス・カルカス『フォスター卿の建築術』(2014年、イギリス、76分)：建築意匠・設計
- ヴィム・ヴェンダース(製作総指揮)『もしも建物が話せたら』(2016年、ドイツ・デンマーク・ノルウェー・オーストリア・フランス・アメリカ・日本、165分)：建築と文化・社会、モニュメントとしての建築

## ロボット倫理

- 北久保弘之『老人Z』(1991年、日本、80分)：介護ロボットの暴走、高齢化社会
- ウォーリー・フィスター『トランセンデンス』(2014年、イギリス・中国・アメリカ、119分)：人工知能と人間の融合、科学技術と社会

## 宇宙倫理

- 富野由悠季『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』(1988年、日本、120分)：スペースコロニー、善と正義
- シドニー・J・フューリー『スーパーマンIV／最強の敵』(1987年、アメリカ、93分)：宇宙ステーション
- アルフォンソ・キュアロン『ゼロ・グラビティ』(2013年、アメリカ、91分)：スペースデブリ

## 技術者倫理

- マイケル・アプテッド『訴訟』(1991年、アメリカ、110分)：フォード・ピント事例
- ルパート・ワイアット『猿の惑星：創世記』(2011年、アメリカ、106分)：技術者の責務、安全性、製造者責任
- マーク・アクバー、ジェニファー・アボット『ザ・コーポレーション』(2004年、カナダ、145分)：企業責任、不祥事

## 人生の意味

- 黒沢明『生きる』(1952年、日本、143分)：余命と人生の意味
- ケネス・ブラナー『フランケンシュタイン』(1994年、イギリス・日本・アメリカ、123分)：実存主義、人生の意味
- デヴィッド・フィンチャー『ファイト・クラブ』(1999年、アメリカ、139分)：人生の意味、生死
- デヴィッド・ラッセル『ハッカビーズ』(2004年、アメリカ、107分)：実存主義



- テリー・ツワイゴフ『ゴーストワールド』（2009年、アメリカ、111分）：人生の意味
- ジョージ・ミラー『マッド・マックス 怒りのデスロード』（2015年、オーストラリア、120分）：実存、生死、人生の意味

## 参考文献・URL

### 映画による哲学・倫理学

- マーク・ローランズ（2004）『哲学の冒険：「マトリックス」でデカルトがわかる』、石塚あおい訳、集英社。
- 浅井篤（編）（2006）『シネマの中の人間と医療：エシックス・シアターへの招待』、医療文化社。
- 内藤理恵子（2011a）『哲学はランチのあとで：映画で学ぶやさしい哲学』、風媒社。
- 内藤理恵子（2011b）『映画じかけの倫理学』、風媒社。
- 児玉聡（著）、なつたか（画）（2013）『マンガで学ぶ生命倫理』、化学同人。
- 志田陽子（編）（2014）『映画で学ぶ憲法』、法律文化社。
- 伊勢田哲治（著）、なつたか（画）（2015）『マンガで学ぶ動物倫理』、化学同人。
- 吉川孝、横地徳広、池田喬（編）（2019（近刊））『映画で考える生命環境倫理学』、勁草書房。
- Smith, M. and Wartenberg, T. E. (2006). *Thinking Through Cinema: Film as Philosophy*. Wiley.
- Wartenberg, T. E. (2007). *Thinking on Screen: Film as Philosophy*. Routledge.
- Livingston, P. (2008). Recent work on cinema as philosophy. *Philosophy Compass* 3 (4): 590–603.
- Mulhall, S. (2008). *On Film*. Routledge.
- Cox, D. and Levine, M. P. (2011). *Thinking Through Film: Doing Philosophy, Watching Movies*. Wiley-Blackwell.
- Livingston, P. (2010). Teaching and learning guide for: Cinema as philosophy. *Philosophy Compass* 5 (4): 359–362.

### フィルム・スタディーズ、映画の哲学

- 本橋哲也（2006）『映画で入門 カルチュラル・スタディーズ』、大修館書店。
- 中村道彦（2007）『映画にみる心の世界——パノラマ精神医学』、金芳堂。
- 坂和章平（2010）『名作映画には「生きるヒント」がいっぱい！』、河出書房新社。
- 小野俊太郎（2011）『映画でレポート・卒論ライティング術』、松柏社。
- エリック・ブレイ（2012）『英語で書こう！映画ジャーナル——Movie Time!』、南雲堂。
- リンダ・シーガー（坪野圭介訳）（2016）『サブテキストで書く脚本術：映画の行間に何が潜んでいるか』、フィルムアート社。

- Carroll, N. (2008). *The Philosophy of Motion Pictures*. Blackwell.
- Livingston, P. and Plantinga, C. (eds.) (2008). *The Routledge Companion to Philosophy and Film*. Routledge.
- Gaut, B. (2010). *A Philosophy of Cinematic Art*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 有益なサイト

- 「哲学とポピュラーカルチャー研究会」 : <https://sites.google.com/view/phil-popc/index?authuser=0>
- A LIST OF PHILOSOPHICAL FILMS: <http://www.philfilms.utm.edu/2/filmlist.htm>
- Philosophers Pick Philosophical Movies (by Justin Weinberg) : <http://dailynous.com/2015/04/14/philosophers-pick-philosophical-movies/>